

降誕祭

晩堂大課

早課

半田教会 2015

降誕祭 晩堂大課 (半田)

司祭 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に。

誦経 「アミン」。

我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

誦経 **[天の王]**

天の王、慰むる者よ、真実の神[°]、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善の宝蔵なる者、生命を賜ふ主よ、来たりて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の霊を救ひ給へ。

誦経 **[聖三祝文][至聖三者][天主経]**

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来たり、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋国と権能と光栄は爾父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に。

誦経 「アミン」。

主憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

来たれ、我等の王・神に叩拜せん。

来たれ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

来たれ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

誦経 **第4聖詠**

吾が義の神よ、我がよぶ時、我に聴き給へ。我が狭^{せまき}に在る時、爾我に廣^{ひろき}を与えたり。我を憐みて、我が禱^{いのり}を聴き給へ。人の子よ、我が榮^{さかえ}の辱^{はずか}しめらるること何^{いづれ}の時に至るか、爾等虚^{むなしき}を好み 詭^{いつわり}を求むること何^{いづれ}の時に至るか。爾等主が其聖者を析ちて己^{その}に属せしめしを知れ、我よべば、主は之を聴く。怒りて罪を犯す母れ、榻^{とこ}に在るとき爾等の心^{こゝろ}に謀りて、己^{おのれ}を鎮めよ。義の祭を獻^{ささ}げて、主を恃^{たの}め。多くの者は言う、誰か我等に善を示さん。主よ、爾の顔^{かんばんせ}の光を我等に顯^{あらわ}し給え。爾の我が心に楽しみを満つるは、彼等が餅^{ぼん}と酒と油とに豊かなる時より勝^{まさ}れり。我安然^{あんぜん}として優^よし寝ぬ、蓋^{けだし}主よ、独り爾は我に無難にして

世を渡らしめ給ふ。

<第6聖詠、第12聖詠、第24聖詠 第30聖詠 第90聖詠省略>

誦経 光栄は父と子と聖神^ろに帰す、今も何時も世世に、「アミン」。
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光栄は爾に帰す。(三次)

(司祭は王門前に出てくる)

司祭 神は我等と偕^{とも}にす、異邦人よ、此を知りて従へよ、神我等と偕^{とも}にすればなり。(イザヤ8:9-9:7)
(詠) 神は我等と偕^{とも}にす、異邦人よ、此を知りて従へよ、神は我等と偕^{とも}にすればなり。



司祭	地の極 ^{はて} までも之 ^{これ} を聴け、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	権力ある者よ、従へ、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	復 ^{また} 勢 ^{いきおい} を張らば、復 ^{また} 敗られん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	謀 ^{はかりごと} を設けば、主は之 ^{これ} を毀 ^{こぼ} たん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	言 ^{ことば} を出さば、必 ^い 成 ^{かならず} らざらん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	爾等の畏るる所は我等畏れず、驚かず、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	主我が神を以て聖と為す、彼は我が畏 ^{おそれ} とならん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	我彼を頼まば必ず我を聖にせん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	我彼を望み、彼に因 ^よ りて救を得ん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	視よ、我及び神が我に與 ^{あた} へたる諸子は此に在り、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	幽冥 ^{くらやみ} の中を行く民は 大なる光を見たり、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	死の蔭 ^{かげ} の地に居る者よ、光は爾等を照らさん、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	蓋 ^{けだし} 嬰 ^{おきなご} は我等の為に生れ、子は我等に賜はりたり、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	権柄 ^{その} は其肩に在り、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	其 ^{その} 和平は終 ^{おわり} なし、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	其名は 大なる議事の使者と稱 ^{とな} へらる、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	神妙なる議士と稱 ^{とな} へらる、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。
司祭	大能の神、主宰、和平の君と稱 ^{とな} へらる、	(詠)	神は我等と偕 ^{とも} にすればなり。

司祭 来た世の父と稱へらる、 (詠) 神は我等と偕にすればなり。

司祭 神は我等と偕にす、異邦人よ、此を知りて従へよ、
(詠) 神は我等と偕にすればなり。

司祭 光栄は父と子と聖神に帰す、 (詠) 神は我等と偕にすればなり。

司祭 今も何時も世に、「アミン」、 (詠) 神は我等と偕にすればなり。

(もう一度繰り返し)

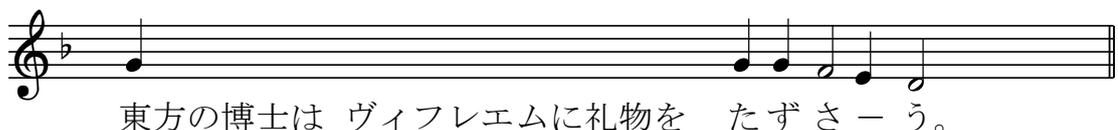
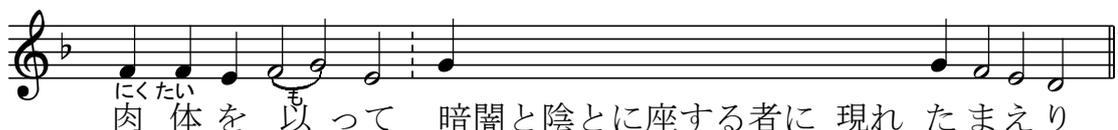
(詠) 神は我等と偕にす、異邦人よ、此を知りて従へよ、神は我等と偕にすればなり。

(詠) [リティヤのスティヒラ]

第一調。(修士イオアンの作)。

(楽譜は次ページ) <歩きながら玄関前へ。晴れだったらリティヤは外で>

天地は今日諸預言者と偕に楽しむべし、諸天使と衆人とは属神に祝ふべし、蓋神は童貞女より生れて、肉体を以て幽闇と蔭とに坐する者に現れ給へり。洞及び芻槽は彼を受け、牧者は奇蹟を傳へ、東方の博士はヴィフレムに禮物を攜ふ。我等も不当の口を以て天使の如く讚歌を彼に奉らん、至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、蓋諸民の期望は来り、来りて我等を敵の奴隷より救ひ給へり。



かれ
彼にたてまつらん 至とたかきに 光栄 神に 帰し
地には平安 くだれり、 蓋、諸民の望みは 来たり、
来たりて 我等を 敵の 奴隷より 救い たまえり。

[リテイヤ]

輔祭 神や、爾の民を救ひ、及び爾の嗣業に福を降し給へ、慈憐と洪恩とを以て爾の世界に臨み、正教の「ハリスティアニン」等の角を高うし、我等に爾の豊なる憐を垂れ給へ、至浄なる我等の女宰・生神女。永貞童女マリアの祈りと、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光栄なる尊き預言者・前駆・授洗イオアン、光栄にして讚美たる聖使徒、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者・大ワシリイ、神学者グリゴリイ、金ロイオアン、我等の聖神父ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父全ロシアの奇蹟者ペトル、アレキシイ、イオナ、フィリップ、我等の聖神父イルクーツクの主教・奇蹟者インノケンティ、光栄なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキムビアンナ、聖某(本堂の聖人)及び悉くの聖人の転達に因りて、大仁慈の主や、爾に求む、我等罪人爾に禱る者に聆き納れて、我等を憐めよ、

(詠) 主憐めよ、12回

主あわれめ。主あわれめ。主あわれめよ 主あわれめ。
主あわれめ。主あわれめ。主あわれめ。主あわれめ。主あわれめよ。
主あわれめ。主あわれめ。主あわれめよ

輔祭 又我が国の天皇、其及び国を司る者の為に禱る、

(詠) 主憐めよ、12回

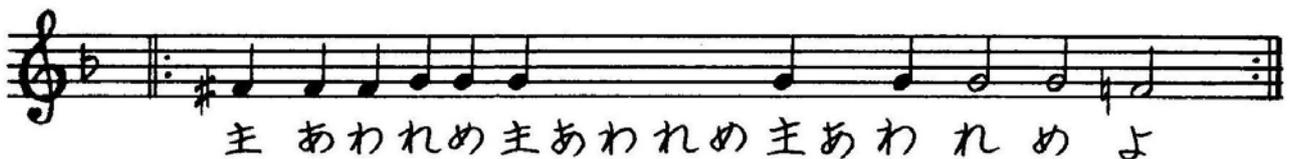
又教會を司る我等の(府)主教(某)、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為、凡そ憂患困難にして神の憐と佑けとを要する「ハリスティアニン」の靈の為、此の聖堂と慎

みて此に来る者とを覆はんが為、全世界の安和と整齊との為、神の聖なる諸教会の堅立の
 為、勉励と神を畏る心とを以て劬勞服役する我等の諸父兄弟を助け救はんが為、参拝する
 を得ざる者と他出する者との為、病に臥す者を醫さんが為、已に過ぎ去りし悉くの我等の
 父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の安眠・寛宥・福たる記憶・諸罪の赦免
 の為、虜となりし者の救はれんが為、務を執る我等の兄弟、及び凡そ此の尊貴なる聖堂に
 務むる者と嘗て務めし者の為に禱りて曰はん、

(詠) 主憐めよ、12回

輔祭 又此の都邑（修道院に於ては此の聖修道院）凡の都邑と地方が、飢饉・疫病・地震・水難・火難・
 劍難・外攻・内乱より護られ、我が善にして人を愛する神が仁慈と哀憐とを垂れて、凡そ
 我等に臨む怒を遏め、其我等に逼る義なる罰より我等を救ひ、及び我等を憐むが為に禱る、

(詠) 主憐めよ、3回



輔祭 又主・神が我等罪なる者の禱の声を聆き納れて、我等を憐むが為に禱る、

(詠) 主憐めよ、3回（司祭祈禱に挙げる生者死者を黙念、）

司祭 （高声）神我が救世主、地の四極と遠く海に居る者との恃や、我等に聞き給へ、主宰や、我
 等の罪に慈憐を垂れ、慈憐を垂れて我等を憐み給へ、
 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ズ、今も何時も世世
 に、

(詠) 「アミン」

司祭 衆人に平安、

(詠) 爾の神にも

輔祭 我等の首を主に屈めん、

(詠) 主爾に

（衆人首を屈めて地に俯す）

司祭 （高声）主宰大仁慈なる主イイススハリストス我等の神や、至浄なる我等の女宰・生神女・
 永貞童女マリアの禱と、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光榮なる尊き
 預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、光榮なる凱旋の聖致命者、克
 竹捧神なる吾が諸神父、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者大ワシリイ、神学者グリゴ
 リイ、金口イオアン、我等の聖神父ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父
 全ロシヤの奇蹟者ペトル アレキシイ イオナ フィリップ、我等の聖神父イルクーツク
 の主教・奇蹟者インノケンティ、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、聖某
 （本堂の聖人の名を挙グ）及び爾が悉くの聖人の轉達に因りて、我等の祈禱を聆き納れ、
 我等に罪過の赦を賜ひ、我等を爾が翼の蔭に覆ひ、諸の仇敵を我等より遠ざけ、我等の生
 命を平安ならしめ給へ、主や、我等と爾の世界とを憐み、并に我等の霊を救ひ給へ、爾は
 善にして人を愛する主なればなり、

(詠) アミン

【挿句のスティヒラ】



今日 至大 至栄なる奇蹟は行われたり、童貞女は生みて
胎は損なわれず、言は身を取りて父をはなれ-ず、
諸 天使は 牧者ととともに讃 栄し、我等も彼等と共に呼-ぶ、
至高きには 光荣神に 帰し、 地には 平安 くだれ-り

第三調

誦經 A 句、我黎明の前に腹より爾を生めり、主は誓いて悔いず。

誦經 B 今日童貞女は萬有の造成主を生む。エデムは洞を奉り、星は黑暗に在る者に日たるハリストスを示し、博士は信に照され、礼物を獻じて伏拝し、牧者は奇蹟を見、諸天使は讃詠して曰ふ、至高きには光荣神に帰す。

誦經 A 句、主我が主に謂へり、爾我が右に坐せよ。

誦經 B 主イイススがイウデヤのウィフレエムに生れし時、東より博士来りて、人体を取りし神に伏拝し、其寶盒を啓きて、熱心に貴き礼物を獻じたり、その世々の王たるに由りては鍊金を、万有の神たるに由りては乳香を、不死の三日の死者たるに由りては没薬を。万民来りて、我等の靈を救はん為に生れ給ひし主に伏拝せん。

誦經 A 光荣は父と子と聖神に帰す。

誦經 B イエルサリムよ、楽しめ、シオンを愛する者よ、皆祝え。今日アダムの定罪の久しき繯縛は釋かれ、樂園は我等の為に啓かれ、蛇は虚しくせられたり、蓋其先に誘ひし者が今造物主の母と為りしを見たり。嗚呼深いかな、神の富と智慧と知識や、凡その肉身の為に死の縁由と為りし者、罪の器は、生神女に縁りて、全世界の救の首となれり、蓋純全なる神は赤子として彼より生れ、其生るるを以て童貞を封印し、襁褓を以て罪の縛を解き、嬰兒たるを以てエワの産痛の患を醫し給ふ。故に万物は祝いて楽しむべし、蓋ハリストスは之を新にし、かつ我等の靈を救わんために来り給えり。

誦經 A 今も、何時も世々にアミン

誦經 B ハリストス神よ、爾は洞に入り給えり、芻槽は爾を受け、牧者と博士とは伏拝せり。その時、諸預言者の宣伝は應へり、天使の軍は奇としてよびて曰へり、独り人を愛する主よ、光荣は爾の寛容に帰す。

【シメオンの祝文】

主 宰よ、いま ^{な-んじ} 爾 の ことばに ^{した} 従 がいて、

^{な-んじ} 爾 の 僕をゆるし 安然としてゆかし—む。

^{けだし} 蓋 我が目は ^{な-んじ} 爾の ^{すく} 救いを見たり、なんじが

万民の前に そなえしものなり。是れ 異邦人を照らす

ひかり、^{およ} 及び ^{な-んじ} 爾の民 イズライリの ^{さかえ} 榮なり。

誦経 【聖三祝文】[至聖三者][天主経]

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を ^{いさぎよ} 潔くせよ、主宰よ、我等の ^{あやまち} 愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光荣は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に ^{いま} 在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来たり、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に与え給え、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給え。

司祭 蓋国と権能と光荣は爾父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」

【降誕祭トロパリ】 4 調 (ニコライのトロパリと同じメロディ) 3 回

ハリストス 我が神^{かみ}や、 爾の降誕は世界に知恵の光を照らせり

これによって星に 勤むるものは、 星に 教えられて、

爾義の日を 拝 が み、 爾上よりの東を 覚 れ り。

主や、 光栄は 爾に 帰 す。

司祭 主に祈らん

(詠) 「主、憐れめよ」

司祭 主イイススハリストス我等の神、五餅に福を降ろして五千人を飽かしめし・・・

(詠) 「アミン」 「願わくは 主の名は 崇め讃められ 今より 世々に至らん」 3回

司祭 [発放詞] 願わくは主の降福は、其の恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も世々に

(詠) 「アミン」 早課へ

早課 (半田)

B

至とたかきに 光 榮 か 神 に 帰 し、
 地には 平 安 ぐ だ り 人 には 恵 み の 臨 め り

(3 回)

主 - よ 我 が ぐ ち び る を ひ ら け
 し か せ ば な ん じ の 讚 美 を あ げ ん と す

(2 回)

【六段の聖詠】

【第 3 聖詠】

主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は我が 霊 を指して、彼は神より救いを
 得ずと云ふ。然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、我の榮なり、爾は我が 首 を挙ぐ。我が声をもつ
 主に呼ぶに、主はその聖山より我に聴き給ふ。我臥し、寝ね、又覚む、主は我を扞ぎ衛ればなり。
 環りて我を攻むる万民は、我之を懼れざらん。主よ、起きよ、吾が神よ、我を救い給へ、蓋爾は我
 が諸敵の頬を批ち、悪人の齒を折けり。救いは主に依る、爾の降福は爾の民に在り。
 我臥し、寝ね、又覚む、主は我を扞ぎ衛ればなり。

【第 37 聖詠】

主よ、爾の 憤 りを以て我を責むる母れ、爾の怒りを以て我を罰する母れ、蓋爾の矢は我に刺さり、
 爾の手は重く我に加わる。爾の怒りに依りて我が肉に傷まざる所なく、我の罪に因りて我が骨は安
 きを得ず、蓋我が不法は我が 首 に溢れ、重任の如く我を圧す、我の無智に依り我が傷腐れて且つ
 臭し。我屈まりて仆れんとし、終日憂ひて行く、蓋我が腰は熱に悩まされ、我が肉に傷まざる所
 なし。我力 衰 えて痛く憊れ、我が心の裂くるによりて號ぶ。主よ、我が 悉 くの願いは爾の前に在
 り、我が歎息は爾に隠るるなし。我が心は戦い 栗 き、我が力は我より脱け、我が目の光も已に我
 にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命を
 覓 むる者は網を設け、我を 害 わんと欲する者は我が淪亡のことを言いて、毎日悪しき 謀 を圖む、
 然れども我は 聾 の如く聴かず、啞 の如く己の口を啓かず、是に於て我は聞かなく、その口に

答うる所なき人の如くなれり、蓋主よ、我爾を恃む、主我が神よ、爾聴き給わん。我言えり、願はくは敵は我に勝たざらん、我が足の踏つ時、彼等は我に向いて誇り高ぶる。我殆ど仆れんとす、我の憂は常に我が前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の為に甚哀む。我が敵は生きて愈強く、故なくして我を疾む者は益多し、悪を以て我の善に報ゆる者は、我が善に従うに因りて我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の救主よ、速に來たりて我を救ひ給え。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の救主よ、速に來たりて我を救ひ給え。

【第62聖詠】

神よ、爾は我の神なり、我暁より爾を尋ぬ、我が靈は渴きて爾を望み、我が身は空しくし燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕ふ、爾の能力と爾の光榮とを見ん為なり、我が曾て爾を聖所に觀しが如し、蓋爾の愛憐は生命に愈る。我が口爾を讚美せん。是くの如く我生ける時爾を崇め讚め、爾の名に依りて我が手を挙げん。我が靈は飽かざる事油脂を以てするが如く、我が口飲ぶの聲にて爾を讚美す、榻にて爾を記憶し、夜更に爾を思ふ時に在り。蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。彼の我が靈を害はんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等刃にかかりて、狐の獲物とならん。惟王は神の為に楽しまん、凡そ彼を以て誓ふ者は譽れを得ん、蓋いつわりを言ふ者の口は塞がれんとす。夜更に爾を思ふ、蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す。(3次)

<以下、87, 102, 142 聖詠省略>

【大連禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐めよ
 輔祭 上より降る安和と我等が靈の救いの為に主に禱らん、
 輔祭 全世界の安和神の聖なる諸教会の堅立、及び衆人の合一の為に主に禱らん
 輔祭 此の聖堂、及び信と慎みと神を畏る心とを以て此に來る者の為に主に禱らん、
 輔祭 教会を司る我等の主教(某)、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の為に主に禱らん、
 輔祭 我が国の天皇及び国を司る者の為に主に禱らん、
 輔祭 此の都邑と凡の都邑と地方、及び信を以て此の中に居る者の為に主に禱らん、
 輔祭 氣候順和、五穀豊饒、天下泰平の為に主に禱らん、
 輔祭 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭うる者、虜となりし者、及び彼等の救い

の為に主に祷らん、

輔祭 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが為に主に祷らん、

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋凡そ光栄尊貴伏拝は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、 (詠)「アミン」

【主は神なりとトロパリ】 日本では3回だが、本来は下記の句に続いて4回。第4句に続いてトロパリ。

主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、「主は神なり…」

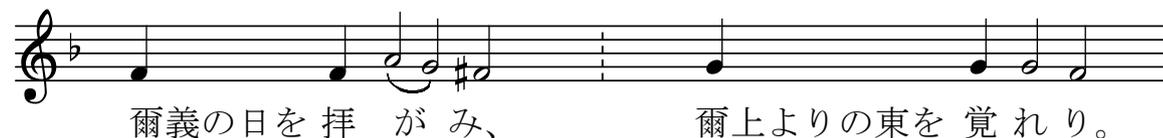
(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、「主は神なり…」

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、「主は神なり…」

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、「主は神なり…」



(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、



【ポリエレイ】 (多油祭) (第 134 聖詠-135)

主の名をほめあげよ 主のよほくやほめあげよ

ア リルイヤア リルイヤア リルイヤ

イエルサリムにましますの主は シオンにあがめほめらる

ア リルイヤア リルイヤア リルイヤ

主をととみほめよ アリルイヤア リルイヤ

かれは仁慈にしてそのあわれみは世世にあれば

なりアリルイヤ 天のかみをととみほめよ

アリルイヤア リルイヤそのあわれみは世

世にあれば なりアリルイヤ

讃歌

生命を賜ふハリストスよ、我等爾今我等の為に婚姻を識らざる至浄なる童貞女マリヤより身にて生れ給ひし主を讃揚す。

讃歌 ズナメニ

いのちを たまう ハリス トス よ

われら なんじ いま われら の た め に

婚 姻 を 知 ら ざ る 至 浄 な る 童 貞 女 マ リ ヤ よ ー り

身 に て 生 ま れ た ま い し 主 を 讃 揚 す

【小連祷】

【アンティフォン】 4 調（祭日は歌う）

我が ^{おきな} 幼き と-き- より 多くの欲は 我を 攻む

救世主や なんじ み-ず から 我を守り防ぎて 救いた まえ

シオン を、にくむ ものや、 主よりはじを受けよ

くさの火に焼かるるがごとくなんじもつくされん
 光えいはちちと子と聖神に帰す
 いまも-いつも世世にアミン
 およそ-のたましいは聖神にて生かされ
 きよきを以ていよいよのぼり聖三者の一体にて
 奥密に照らさる

ポロキメン、第四調。

我黎明の前に腹より爾を生めり、主は誓ひて悔いず。

句、主我が主に謂へり、爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の台と為すに迄れ。

われしのめ
 我黎明の前に腹よりなんじを生めり 主はちかいて悔いず

輔祭 主に祷らん、

(詠) 主、憐れめよ

司祭 (高声) 蓋我が神や、爾は聖にして聖なる者の中に居る、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、
 今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

司祭 凡そ呼吸ある者は主を讚め揚げよ、

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讚め揚げよ、(まっすぐ)

司祭 (句) 神を其聖所に讚め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讚め揚げよ、

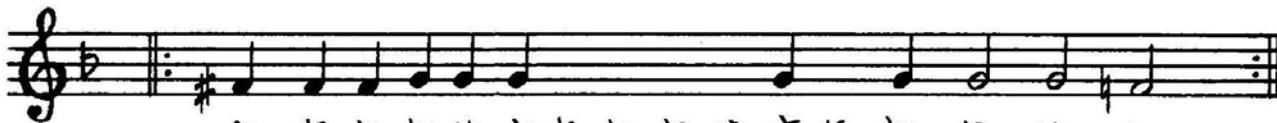
(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讚め揚げよ、(まっすぐ)

司祭 凡そ呼吸ある者は

(詠) 主を讚め揚げよ、

司祭 我等に聖福音經を聴くを賜うを主・神に禱らん、

(詠) 主憐めよ (3次)



主 あわれめ主 あわれめ主 あわれめ よ

輔祭 睿智肅みて立て、聖福音經を聴くべし、

司祭 衆人に平安、

(詠) 爾の神にも、

司祭 (某) 伝の聖福音經の読み、 (詠) 主や、光榮は爾に帰す、光榮は爾に帰す、(まっすぐ)

福音經はマトフェイニ端。

イイススハリストスの生まるること*左の如し、其母マリヤ、イオシフに聘せられて、未だ婚せざる先に、聖神に由りて孕めること見れたり。其夫イオシフは義人にして、これを願にせしことを欲せず、私に彼を離さんことを望めり。然れども此の事を思へる時、視よ、主の使夢に彼に現れて曰へり、ダワイドの子イオシフよ、爾の妻マリヤを納るることを懼るる勿れ、蓋其内に孕まれし者は聖神に由るなり、彼は子を生まん、爾其名をイイススと名づけん、彼其民を其罪より救はんとすればなり。凡そ此の事の成りしは、預言者を以て言いし所に應ふを致す、曰く、視よ、童女孕みて子を生まん、其名はエムヌイルと称へられん、訳すれば神我等と偕にするなり。イオシフ寝より起きて、主の使の彼に命ぜし如く 行い、其妻を納れたり。惟未だ室を同じくせざるに、其冢子を生むに及べり、則其名をイイススと名づけたり。

【第 50 聖詠】

神や、爾の大なる憐に因て我を憐み、爾が恵の多きに因て我の不法を抹し給へ。
屢我を我が不法より洗ひ、我を我が罪より清め給へ、蓋我は我が不法を知る、我の罪は常
に我が前に在り。我は爾獨爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行へり、爾は爾の審断
に義にして、爾の裁判に公なり。夫我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て我を生め
り。夫爾は心に眞實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。「イソプ」を以て我に
沃げよ、然せば我潔くならん、我を滌へよ、然せば我雪より白くならん。我に喜と樂とを
聞かし給へよ、然せば爾に折られし骨は欣ばん。爾の顔を我が罪より避け、我が盡くの
不法を抹し給へ。神や、清潔き心を我に造り、正直き靈を我の衷に改め給へ。我を爾の
顔より逐ふこと勿れ、爾の聖神を我より取上ること勿れ。爾が救ひの喜を我に還し、
主宰たるの神を以て我を固め給へ。我不法の者に爾の道を教へん、不虔の者は爾に歸ら
んとす。神や、我が救ひの神や、我を血より救ひ給へ、然せば我が舌は爾の義を讚揚げん。
主や、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす、蓋爾は祭を欲せず、

欲^{ほつ}すれば我^{われ}之^{これ}を献^{たてまつ}らん、爾^{なんじ}は燔^{やきまつり}祭^{よろこ}を喜^{かみ}ばず。神^{よるこ}に喜^{まつり}ばるるの祭^{つうかい}は痛^{たましい}悔^{なり}の靈^{なり}なり、
 痛^{つうかい}悔^{なり}して謙^{けん}遜^{そん}なるの心^{こころ}は、神^{かみ}や、爾^{なんじ}輕^{かろん}じ給^{たま}わず。主^{しゅ}や、爾^{なんじ}の恵^{めぐみ}に因^{より}て恩^{おん}をシオンに垂^たれ、
 イエルサリムの城^{じょう}垣^{えん}を建^たて給^{たま}へ。

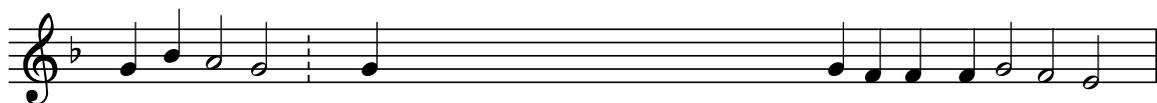
<この間に交替で祝福を受けに行く>

スティヒラ

DU 聖詠後 アナイニフム調



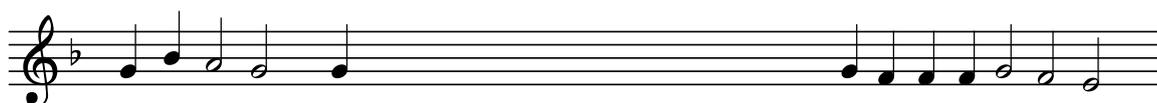
光栄は 父と子と 聖神に 帰 - す 万有は 今日喜びに



満てらる ハリストスは 童貞女より 生まれ たまえり



いま 何時も 世世にアミン 万有は 今日喜びに



満てらる ハリストスは ヴィフレエムに 生まれ たまえり



神や、爾の大いなる 憐れみに よって 我を 憐 れ - み

爾が恵みの 多きに よって 我の不法を 抹した ま - え

至高きには光栄 神に 帰 し 地には平安 くだ - り

今日 ヴィフレエムは 常に父とともに座する 者を 受 - け

今日 諸天使は生まれし 嬰兒を 神に 適うが如く 讚 榮 す

至高きには光栄神に 帰 - し 地には 平安 くだ - り

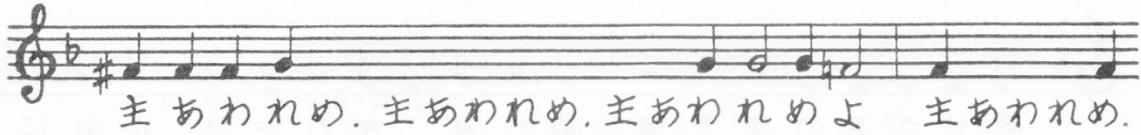
人には めぐみのぞめ - り

輔祭 神や、爾の民を救ひ、及び爾の嗣業に福を降し給へ、慈憐と洪恩とを以て爾の世界に臨み、正教の「ハリスティアニ」等の角を高うし、我等に爾の豊なる憐を垂れ給へ、至浄なる我等の女宰・生神女。永貞童女マリアの祈りと、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光栄なる尊き預言者・前駆・授洗イオアン、光栄にして讚美たる聖使徒、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者・大ワシリイ、神学者グリゴリイ、金口イオアン、我等の聖神父ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父全ロシアの奇蹟者ペトル、アレキシイ、イオナ、フィリップ、我等の聖神父イルクーツクの主教・奇蹟者インノケンティ、光栄なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキムびアンナ、聖某(本堂の聖人)及び悉くの聖人の転達に因りて、大仁慈の主や、爾に求む、我等罪人爾に禱る者に聆き納れて、我等を憐めよ、

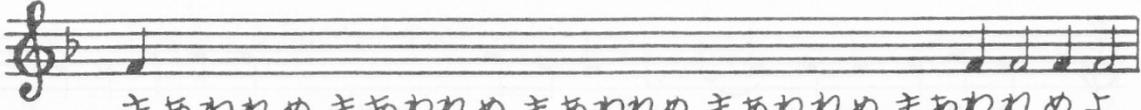
(詠) 主憐めよ、12 次

(高声) 爾が独生子の仁慈と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神と偕に讚揚せらる、今も何時も世世に、

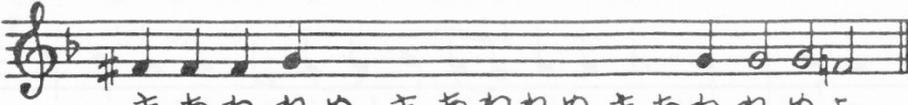
(詠) 「アミン」



主あわれめ。主あわれめ。主あわれめよ 主あわれめ。



主あわれめ。主あわれめ。主あわれめ。主あわれめ。主あわれめよ。

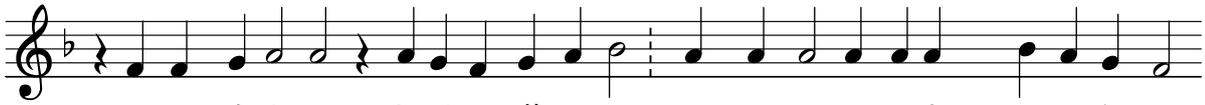


主あわれめ。主あわれめ。主あわれめよ

カノン 第一調。

第一歌頌

イルモス、ハリストス生る、崇め讃めよ、ハリストス天よりす、迎へよ、ハリストス地に在り、上れよ、地挙りて主に歌へよ、人々よ、楽しみて讃め揚げよ、彼光榮を顕したればなり。



ハリストス 生まる あがめ 讃めよ ハリストス天よりす むかえよ



ハリストス地 にあり あがれよ 地こぞりて 主にうたえよ



ひとびとよ 楽しみて 讃めあげよ 彼光榮を顕したればなり。

附唱 主よ光榮は爾の聖なる降誕に帰す。

原神に倣りて造られ、罪に由りて腐れ、全く朽壞に従ひて、最美しき神聖なる生命を失ひし者を、睿智なる造成主は改め造り給ふ、彼光榮を顕したればなり。

附唱 主よ光榮は爾の聖なる降誕に帰す。

造物主は其手にて造りし人の亡ぶるを見て、天を傾けて降り、神聖なる潔き童貞女より實に身を取りて、人の全性を活かし給ふ、彼光榮を顕したればなり。

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

睿智と言と能力、父の子及び光なるハリストス神は、天上又地上の有能者に奥密を顯さずして人と爲りて、我等を新にし給へり、彼光榮を顕したればなり。

第三歌頌

イルモス、世の無き前に分離なく父より生れし子、末の日に種なく童貞女より身を受けしハリストス神に呼ばん、我等の角を高くせし主よ、爾は聖なり。

世のなきさきに ^{わかれ}分離なく 父より 生まれし子
 すえの日に たねなく 童貞女より 身を受けし
 ハリストス かみに呼ばん 我等の角を たかくせし主や
 なんじは 聖なり

附唱 主よ光栄は爾の聖なる降誕に帰す。

上^{うへ}よりの吹嘘^いに與^ありたる土^{つち}の^{おんな}アダム、女^いの誘^いの爲^いに朽壞^いに従^いいし者は、ハリストス^{おんな}が女^{おんな}より生^うるるを見^みて顛^よぶ、吾^わが爲^たに我^{われ}に似^にたる者^{もの}と爲^なりし主^{しゅ}よ、爾^{なんじ}は聖^{せい}なり。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる降誕に帰す。

朽^くち易^{やす}くして低^{ひく}き合^{ごう}成^{せい}に與^ありて、其^{その}の受^うけたる賤^{いや}しき身^みに神^{かみ}の性^{せい}を合^あわせ、人^{ひと}と爲^なりて神^{かみ}たるを失^うしな^しずして、我^{われ}等^らの角^つを高く^{たか}くせしハリストス^{しゅ}主^{なんじ}よ、爾^{せい}は聖^{せい}なり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

ワィフレエム、イウダの諸^{しよ}侯^{こう}の王^{おう}城^{じやう}よ、樂^{たの}しめ、蓋^{けだし}イヅライリの牧^{ぼく}者^{しや}、ヘルワィムの肩^{かた}に在^ある主^{しゅ}ハリストス、顯^{あら}わに爾^{なんじ}より出^いでて我^{われ}等^らの角^つを高く^{たか}くせし者^{もの}は萬^{ばん}衆^{しゆ}の王^{おう}と爲^なれり。

【小連禱】

第四歌頌

イルモス、イエッセイの根より生ぜし枝及び其花なる讚美たるハリストスよ、爾は童貞女より出で給へり。形なき者且神よ、爾は夫に適かざる者より身を取りて、樹蔭繁き山より来給へり。主よ、光栄は爾の力に帰す。

イエッセイの根より 生ぜし えだ及びその はなる 讚美たる
 ハリストスよ 爾は 童貞女より 出でたまえり かたちなき者

かつかみや なんじは 夫に 適かざる者より 身を取りて
 こかげ 樹陰 繁き山より 来たりたまえり 主や 光榮は 爾に歸す

附唱 主よ光榮は爾の聖なる降誕に歸す。

昔 ^{むかし} イアコフの ^{よげん} 預言して、^{ばんみん} 萬民の ^ま 踈つ ^{ところ} 所の ^{もの} 者と ^な 名づけし ^{ハリストス} ハリストスよ、^{なんじ} 爾は ^{ぞく} イウダの ^{かがや} 族より ^{かがや} 輝き
 出で、^{きた} 来りて、^{けん} ダマスクの ^{けん} 權と ^{ばんどり} サマリヤの ^{うぼ} 擄物とを ^{まとい} 奪ひ、^か 迷に ^か 代へて、^{かみ} 神に ^{かな} 適ふ ^{おしえ} 教を ^{たま} 立て給
 へり。主よ、^{しゅ} 光榮は ^{なんじ} 爾の ^{ちから} 力に ^き 歸す。

附唱 主よ光榮は爾の聖なる降誕に歸す。

主宰よ、^{なんじ} 爾は ^い イアコフより ^{ほし} 出づる ^{ひかり} 星として ^{いにしえ} 古の ^{よげん} 預言者 ^{しや} ワラアムの ^{ことば} 言を守りて ^{ほし} 星を ^{まな} 學ぶ
 智者、^{ちしや} 異邦民の ^{いほうみん} 初物として ^{なんじ} 爾に ^{みちび} 導かれ ^{もの} たる ^{よるこび} 者を ^み 悦に ^{あきらか} 充てて、^{かれら} 明に ^う 彼等を ^{たま} 受け給へり。
 主よ、^{しゅ} 光榮は ^{なんじ} 爾の ^{ちから} 力に ^き 歸す。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

ハリストスよ、^{なんじ} 爾は ^{どうていじよ} 童貞女の ^{はら} 腹に ^{くだ} 降りし ^{あめ} こと、^{ひつじ} 雨が ^け 羊の ^{くだ} 毛に ^{ごと} 降るが ^{したたり} 如く、^ち 点滴が ^お 地に ^お 墜つるが
 ごとし。^{きゆうせいしゅ} 救世主よ、^{しよとう} エフィオピヤと ^{ぜんち} ファルシス、^{けん} アラウィヤの ^と 諸島と ^{けん} ミディヤの ^と サワ、^と 全地に ^と 權を ^と 執
 る ^{もの} 者は ^{なんじ} 爾に ^ふ 俯伏せり。主よ、^{しゅ} 光榮は ^{なんじ} 爾の ^{ちから} 力に ^き 歸す。

第五歌頌

イルモス、和平の神、仁慈の父よ、爾我等に和平を賜ふ爾の大なる議事の使者を遣し給へり。故に我等神を知る光に導かれて、夜過ぎて朝に爾人を愛する主を崇め讃む。

和平の神 仁慈のちちよ なんじ われらに 和平を たまう
 おお 爾の 大いなる 議事の 使者を 遣わせ たまえり。 故に 我等

神を知る 光に みちびかれて 夜すぎて あさに
爾人を愛する 主をあがめ 讃む。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる降誕に帰す。

ハリストスよ、爾^{なんじ}はケサリの命^{めい}に従^{したが}ひて、僕^{ぼく}の籍^{せき}に登^{のぼ}りて、我等^{われら}敵^{てき}と罪^{つみ}との僕^{ぼく}たる者^{もの}を自由^{じゆう}にし、全^{まった}く我等^{われら}の如^{ごと}く貧^{ます}しくなりて、此^この合^{ごう}一^{いつ}と體^{たい}合^{ごう}とを以^{もつ}て塵^{ちり}に屬^{ぞく}する者^{もの}を神^{しん}成^{せい}し給^{たま}へり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

視^みよ、古^{いにしへ}に預^{よげん}言^{ごとく}せし如^{ごとく}く、童^{どう}貞^{てい}女^{じよ}は孕^{はら}みて、人^{ひと}と爲^なりし神^{かみ}を生^うみて、童^{どう}貞^{てい}女^{じよ}たるを失^{うしな}はず。我^{われ}等^ら罪^{つみ}なる者^{もの}は彼^{かれ}に依^よりて神^{かみ}と和^わ睦^{ぼく}し、信^{しん}を以^{もつ}て眞^{まこと}の生^{しょう}神^{しん}女^{じよ}を讃^ほめ歌^{うた}はん。

第六歌頌

イルモス、海^{うみ}の猛^{もう}獣^{じゆう}はイオナを受けしまま産^う児^{まご}のごとく 腹^{はら}より出^いだせり。童^{どう}貞^{てい}女^{じよ}に入りて身^みを受けし言^{ことば}は其^{その}傷^{きず}なきを守^{まも}りて通^{とお}れり、蓋^{けし}自ら壊^みれに從^{したが}はず、生^うみし者^{もの}をもそこなわずして守^{まも}り給^{たま}へり。

海^{うみ}の猛^{もう}獣^{じゆう}は イオナを受けしまま 産^う児^{まご}のごとく はらより出^いだせり
童^{どう}-貞^{てい}女^{じよ}に入りて身^みを取りしことばは その傷^{きず}なきを守^{まも}りてとおれり
蓋^{けし}自らやぶれに從^{したが}わずして生^うみし者^{もの}をも そこなわずして
まもりたまえり

附唱 主よ光栄は爾の聖なる降誕に帰す。

父^{ちち}が黎^{しの}明^{のめ}の前^{まえ}に腹^{はら}より生^うみ給^{たま}ふハリストス吾^{われ}が神^{かみ}は人^{じん}體^{たい}を以^{もつ}て來^{きた}り、至^{しじょう}淨^{じよう}なる天^{てん}軍^{ぐん}を司^{つかさど}る主^{しゅ}は家^か畜^{ちく}の芻^{かい}槽^{ぼね}に置^おかれ、襁^{むつ}褌^{つき}に裹^{つつ}まるれども諸^{しよ}罪^{ざい}の重^{かさ}なる縲^な縛^{わめ}を解^とき給^{たま}ふ。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

アダム^{あだむ}の合^{ごう}成^{せい}より新^{あらた}なる嬰^{おきなご}兒^{うま}は生^これ、子^こは信^{しん}者^{じや}に賜^{たま}はりたり。彼^{かれ}は來^{らい}世^{せい}の父^{ちち}及^{およ}び宰^{つかさ}にして、大^{おおい}なる議^ぎ事^じの使^し者^{しや}と稱^とへらる、彼^{かれ}は大^{だい}能^{のう}の神^{かみ}にして、萬^{ばん}物^{ぶつ}を其^{その}權^{けん}に保^{たも}ち給^{たま}ふ主^{しゅ}なり。

【小連禱】

小讃詞、第三調。

今童貞女は永在の主を生み、地は載せ難き者に洞を獻ず、天の使は牧者と偕に讃め歌ひ、博士は星に従ひて旅す、蓋我等の為に永久の神は嬰兒として生れ給へり。

<イコス省略>

いま— 処女は いま 処女は え— い—
ざいの 主— --を—生む 主—を—生む
地— -- --は 地—は のせがた—きものに
ほ—ら—を—獻ず ほら—を—獻ず 天
のつか—い 天のつかい ぼくしゃ—とと
もに ほ—め—う—たう ほめ—う—たう
はか—せ—は は—かせはほ—しにしたがっ
て た—び— -- --する た—び—する

けだ しわれら -- の た め に 永 - 久 - - の
か み みどりごとしてうまれたり みどり
ご - と して う ま れ た - り

第七歌頌

イルモス、偕に敬虔に養はれし少者は、不虔の命を顧みずして、火の嚇を恐れず、乃焰の中に立ちて歌へり、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

と も に 敬 虔 に 養 わ れ し 少 者 は 不 虔 の 命 を
か え り み ず し て 火 の お ど し を お そ れ ず
す な わ ち ほ の ほ の う ち に 立 ち て う た え り
先 祖 の か み や、 爾 は 崇 め 讃 め ら - る。

附唱 主よ光榮は爾の聖なる降誕に帰す。

笛を吹く牧者は奇妙なる光の顯見に遇へり、蓋主の光榮は彼等を照し、天使は籲びて曰へり、讃め歌へ、ハリストス生れたればなり。先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

附唱 主よ光榮は爾の聖なる降誕に帰す。

天使の言に従ひて倏天軍は籲べり、至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり、ハリストスは出でて光る。先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

牧者ぼくしゃい曰へり、此この言ことばは何なにぞや、往ゆきて、成なりし事こと、神聖しんせいなるハリストスみを觀みん、乃すなわち ワイフレエムいたりに至いたり、伏ふくは拝はいして、生うみし者ものと與ともに歌うたへり、先祖せんぞの神かみよ、爾なんじは崇あがめ讃ほめらる。

第八歌頌

イルモス、露を出す爐は天然に超ゆる奇蹟の象を顕せり、蓋受けし所の少者を焚かず、神性の火が入りし所の童貞女のを焚かざる如し。故に我等歌ひて呼ばん、悉くり造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

われら 主を 讃めあがめ 伏しおがみて 世世に うたい 讃めん

露つゆを 出だす いろりは 天然に 超ゆる 奇蹟の象を かたち

あらわ せり 蓋けだし受けし ところの 少者しょうしゃを 焚かず

神性の火が入りしところの 童貞女の腹やを焚かざるが ごとし

ゆえに われら うたいて 呼ばん 悉ことごとくの 造物ぞうぶつは

主をあがめて 万世に 讃めあげよ

附唱 主よ光荣は爾の聖なる降誕に帰す。

ワイルンの女むすめは虜とりこにせられしダウィドの子をシオンより牽きて己おのれに就かつしめ、自みずから己おのれの子たる博士を遣し、獻物を齎して、神を己おのれの内に受けしダウィドの女むすめに伏拝せしむ。故に我等歌ひて呼ばん、悉ことごとくの造物ぞうぶつは主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

附唱 主よ光荣は爾の聖なる降誕に帰す。

悲かなしみは樂器を遠ざけたり、蓋けだしシオンの諸子は異邦の地に在りて歌はざりき、ワイフレエムに出でて光れるハリストスはワイルンの悉ことごとくの迷謬と音樂の調和とを解き給へり。故に我等歌ひて呼ばん、悉ことごとくの造物ぞうぶつは主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

ワイルンはシオンの國くにの獲物と掠めたる富とみとを取れり、ハリストスは導みちびく星ほしを以て其寶もつとそのたから

せいがくしゃ おう せいをシオンに就かしめ給ふ。故に我等歌ひて呼ばん、悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

第九歌頌

イルモス、我奇異にして至栄なる秘密を瞻る、洞は天と為り、童貞女はヘルウィムの寶座と為り、芻槽は容れ難きハリストス神の臥し給ふ置き所と為れり、我等歌ひて、彼を崇め讃む。



附唱 我が霊よ、洞に生れし王を讃め揚げよ。

はかせ あらた あらわ いちじる てん ひかり き い しんせい つねならぬ うんこう み 博士は、新に顯れて著しく天に光れる奇異なる新星の常ならぬ運行を觀て、ハリストス王の我等の救の爲に地上にワフレムに生れしを悟れり。

附唱 我が霊よ、博士に伏拝せられし神を讃め揚げよ。

ほし あらわ あらた うま おきな きみ なにところ あ われらこれ ふくはい ため き はかせ 星の顯しし新に生れたる幼き君は何處にか在る、我等之に伏拝せん爲に來れりと、博士の言ひし時、イロドは心騒ぎて大く怒り、神の敵としてハリストスを殺さんことを謀れり。

附唱 我が霊よ、ハリストス王を生みし潔き童貞女、唯一の生神女を讃め揚げよ。

はかせ みちび れいもつ たづさ ふくはい ほし あらわ とき イロドは、博士を導きて禮物を攜へワフレムにハリストスに伏拝せしむる星の現れし時を

と問へり、^{ただかれら}唯^{ほし}彼等^よは星に依りて^{ふるきと}故土に送られて、^{おく}無^{むざん}慙なる殺^{こころし}兒者を^{はずか}辱しめたり。

【小連祷】 <光耀歌は省略>

「凡そ呼吸ある者」とスティヒラ (スティヒラは省略)

凡そ呼吸ある者 4調

凡そ呼吸ある者は 主を讃めあげよ 天より主を 讃めあげよ
 至とたかきに彼を 讃めあげよ 讃め歌は爾 かみに
 帰 - す その 悉くの神使や彼を 讃めあげよ その 悉くの
 軍や、彼を 讃めあげよ 讃め歌は爾 かみに 帰 - す

<スティヒラ省略>

光榮は、今も、第二調。(修士イオアンの作)。

今日ハリストスはウィフレムに童貞女より生る、今日始なき者は始を受け、言は身を取り給ふ。天軍は喜び、地は人々と偕に楽しみ、博士は主宰に礼物を捧げ、牧者は生れし者を奇とす。我等は絶えずよぶ、至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり。

2調

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も 世世 - にアミン
 今日ハリストスはウィフレムに 童貞女より 生まる、今日始めなき者は
 始めを受 - け 言は身を取りたまう 天軍は よろこ - - び



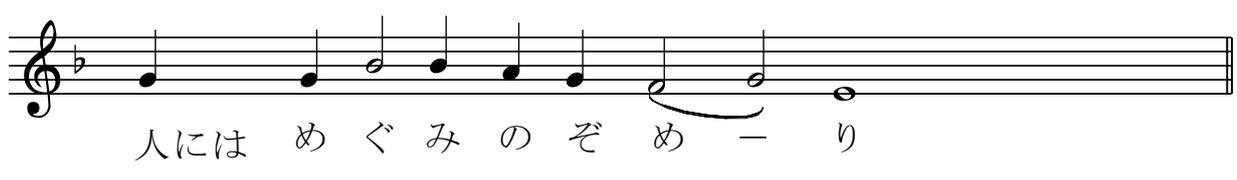
地は人々と共に 楽し---み 博士は主宰に^{れいもつ} 禮物をささげ



牧者は生まれし者を奇とす 我等は絶えず 呼---ぶ



至高きには光栄 神に 帰し、 地には平安 くだ---り



人には めぐみのぞめ---り

【大頌栄】

司祭 光栄は爾我等に光を顕せる主に帰す、

♪ 至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、人には恵み臨めり。)



至とたかきに 光栄 神に 帰し、
地には 平安 くだり 人には 恵み 臨めり

1. 主 天の王、神・父 全能者よ、主 ^{どくせい} 独生の子イイスス・ハリストス、及び 聖神よ、



主 天の王、神・父 全能者よ 主独生の子イイスス・ハリストス、及び 聖神よ、

<以下同様に A B 繰り返して歌う>

2. 爾の大なる光栄に^よ因りて、我等 爾を崇め、爾を^{ほあ}讚め揚げ、

爾を伏し拜み、爾を尊み^{うたひ}、爾に 感謝す。

3. 主 神よ、神の ^{こひつじ} 羔、父の子、世の罪を^{にな}任ひし^者よ、我等を 憐み給へ、

世の諸の罪を任ひし者よ、我等の禱りを納れ給へ。

4. 父の右に坐する者よ、我等を憐み給へ。

5. 爾は独り聖なり、爾は独り主イイスス・ハリストス、神・父の光栄を顯す者なればなり、「アミン」

6. 我 日々に 爾を 讚め揚げ、爾の名を 世々に 崇め歌はん。

7. 主よ、我を守り、罪なくして この日を 度らせ給へ。

8. 主 吾が先祖の神よ、爾は 崇め讚められ 爾の名は 世々に 尊み歌わる「アミン」。

9. 主よ、爾を恃むに因って、爾の 憐みを 我等に 垂れ給へ。

10. 主よ、爾は 崇め讚めらる、爾の 誠めを我に 訓へ給へ。(3次)

11. 主よ、爾は 世世、我等の 避所たり。

12. 我曾て 言へり、主よ、我を憐み、

我が 靈を 醫し給へ、我 罪を 爾に 得たればなり。

13. 主よ、爾に 趨り附く、爾の旨を行ふを 我に教へ給へ、

14. 爾は我の神、生命の源は 爾に在ればなり、

我等 爾の光に於いて 光を觀ん。

15. 憐みを 爾を知る者に 恒に 垂れ給へ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(3次)

光栄は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

(Святой Боже, Святой Крепкий, Святой Бесмертный, помилуй нас.)

【聖なる神】

聖なる神、 聖なる勇毅 聖なる常生 のものよ、
 我等を あわ 憐れめよ、 (3回繰り返す)
 光栄は 父と子と 聖神 に 帰す 今も何時も 世世にアミン
 聖なる常生 のものよ、 我等を あわ 憐れめよ、
 聖なる神、 聖なる勇毅 聖なる常生 のものよ、
 我等を あわ 憐れめよ、 「聖なる神…」もう一度繰り返す

【祭日トロパリ】

ハリストス 我が神 や、 爾の降誕は世界に知恵の光を照らせり
 これによって星に 勤むるものは、 星に 教えられて、
 爾義の日を 拝 がみ、 爾上よりの東を 覚れり。
 主や、光栄は 爾に帰す。

【重連禱】

輔祭 神や、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ。爾に禱る、聆き納れて憐めよ、
(詠) 主憐めよ、(3次)

輔祭 又我が国の天皇及び国を司る者の為に禱る、

輔祭 又教会を司る我等の主教(某)、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為に禱る、

輔祭 又ハリストスを愛する悉くの皇軍の為に禱る、

輔祭 又恒に記憶せらる福たる此の聖堂の建立者、及び已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸
方とに葬られたる正教の者の為に禱る、

輔祭 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐・生命・平安・壮健・救贖・眷顧・寛宥及び諸罪の赦
を賜はんが為に禱る、

輔祭 又此の至尊なる聖堂に物を献り、善業を行ひ、之に勞し、之に歌ひ、及び此に立ちて爾の
大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の為に禱る、

司祭 (高声) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も
何時も世世に、
(詠) 「アミン」

【増連禱】

輔祭 我等主の前に吾が朝の禱を増し加へん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救ひ憐み護れよ、 (詠) 主憐めよ

輔祭 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、 (詠) 主賜へよ

輔祭 平安の神使正しき教導師、吾が靈体の守護者を賜はんことを主に求む

輔祭 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

輔祭 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む

輔祭 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む

輔祭 我等の生命の終が「ハリスティアニン」に適ひ、疾なく、耻なく、平安なること、及びハ
リストスの畏る可き審判に於て宜しき対をなすを賜はんことを求む

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女まりやと、諸聖人と
を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリスト
ス神に委託せん、
(詠) 主爾に

司祭 (高声) 蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も
何時も世世に、
(詠) 「アミン」

司祭 衆人に平安、 (詠) 爾の神にも

輔祭 我等の首を主に屈めん、 (詠) 主爾に

司祭 (祝文を黙誦)、聖なる主、高きに居り卑きを臨み、爾が見ざる所なき目にて萬物を鑑る者や、我等心と体と
の項(くび)を爾の前に屈めて爾に禱る、爾が見えざる手を爾が聖なる住所より伸べて、我等衆人に福を降
し給へ、我等に自由或は自由ならずして犯し罪あらば、爾善にして人を愛する神なるに依りて之を赦して、
我等に今世来世の諸善を與へ給へ、

(高声) 蓋我が神や、我等を憐みて救ふこと爾に帰す、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、

今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

輔祭 睿智

(詠) 福を降せ

司祭 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に

(詠) 「アミン」神や、我が国の天皇と、正教会の教と、正教のすべてのハリストティアニン等を
永く守り給へ、

司祭 至聖なる生神女や、我等を救ひ給へ、

(詠) ヘルビムより尊くセラフィムに並びなく栄え、貞操をやぶらずして神ことばを産みし実の
生神女たる爾を崇め讃む、

司祭 ハリストス神我等の恃や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す、

(詠) 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に「アミン」、主憐めよ(3次)福を降せ、

司祭 (発放詞) _____ハリストス我等の真の神は、其至浄なる母、光栄にして讃美たる
聖使徒聖某(本日聖人の名)及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして
人を愛する主なればなり、

(詠) 「アミン」

【萬壽詞】

神よ、我が国の天皇を、及び国を司る者、我等の(府)主教 _____
及び悉くの正教のハリストティアニン等を 幾とせにも護り給え。